

知覚的リアリティの科学

北崎 充晃

2016年7月22日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

私たちは、世の中をありありとリアルに感じて日々を過ごしていますが、そのリアリティはどのように認識されているのでしょうか。ふとした拍子に、リアリティが「ゆらぐ」ことはあるのでしょうか。豊橋技術科学大学の北崎充晃准教授が、リアリティに迫ります。

Section 1

リアリティ事始め

「知覚的リアリティの科学」というタイトルで、リアリティとは何か、それをどうやって調べることができるのか、心理学とどういう関係にあるのか、最先端のバーチャルリアリティはどうなっているのか、リアリティが変わることで私たちの生活や社会は変わるのかなどについてお話ししていきたいと思います。第1回は「リアリティ事始め」として、普段何気なく使っている「リアル」や「リアリティ」「現実感」について考えてみましょう。

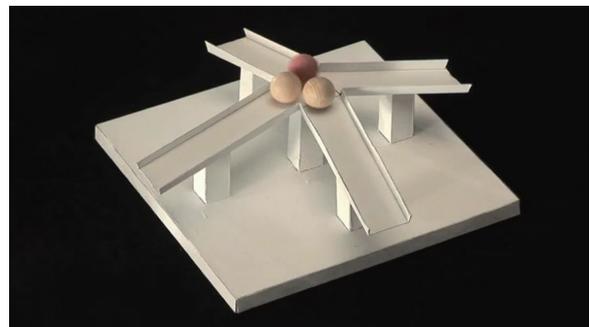
錯 視

図 1-1 の写真は、オーストラリアのメルボルンで私が撮ったものです。空港からバスでメルボルン駅に向かって途中でこのビルが見えて目を疑いました。

駅に着いて、大きなスーツケースを引きずってこの橋のふもとまで戻り、写真に収めました。各階の床が傾いて見えますよね。もちろん、傾いた床のオフィスでは仕事できませんから、実際には傾いていません。「リアルに傾いて見える」、しかし「現実には床は傾いていない」。ここに、リアルや現実の曖昧さがあります。リアルな感じ、リアリティ、そして現実感というときには、「(物理的現実ではそうではなくても)まるでそのように感じる」という意味が含まれていま



図 1-1 現実のカフェウォール錯視 (2008年6月19日に撮影)



動画1-1 Impossible motion: magnet-like slopes (the Best Visual Illusion of the Year Contest 2010)^{(2)*}

す。ちなみに、これは「カフェウォール錯視」をビルの壁にあしらったデザインです。カフェウォール錯視自体もイギリスのブリストルにあるカフェの煉瓦の壁(wall)で発見されたというのも面白いですよ。

次の動画 1-1 は、杉原厚吉教授(元東京大学、現在明治大学)が2010年の世界錯視コンテスト⁽¹⁾で最優秀賞を受賞されたものです。

ボールが坂を登っているように見えます。床にへばりついて、がしがし登って見えるので、ボールに意志があり、お互いに寄り添うように集まっているように